

第 42 年度（2026 年度）ソフトウェア品質管理研究会 分科会紹介

「より良い品質を求めてアジャイルは生まれた」

近年のシステム開発では、DX の進展を背景に、AI を開発に利用したり、製品に組み込んだりする「AI を伴う開発」が急速に広がっています。その多くはアジャイル開発を前提としたイテレーティブなスタイルで進められており、人と AI が対話しながら仮説を更新していく開発が当たり前になりつつあります。

一方で、開発スピードや効率への関心が高まるほど、開発の最前線で浮き彫りになるのが「品質」の問題です。AI が設計や実装に深く関与するようになって、品質を最終的に判断し、その責任を負うのは人間です。では、その前提のもとで、品質保証の考え方や実践はどのように変わるべきなのでしょうか。

本研究会では、これまで取り組んできたアジャイル開発における品質（品質保証、ガバナンス、Done の定義、自動テストなど）に加え、AI 駆動開発のようなイテレーティブな開発スタイルにおける品質のあり方も研究スコープに含めていきます。

本研究会は、第一に参加する研究員自身のための研究会です。研究成果が各自の現場での判断や実践に貢献することを重視しているため、実際の開発・運用の現場をお持ちの方の参加を特に歓迎します。異なる企業、異なるドメイン、異なる立場の研究員が、それぞれの課題や違和感を持ち寄り、ときに意見をぶつけ合いながら議論することで、自分一人では得られない新たな視点や気づきが生まれます。その相互作用の中から有用なテーマを選び、仮説検証を行いながら、1 年間チームで研究・共創していくことが、この研究会ならではの価値です。

想定している参加者は、プロダクトオーナー、開発者、スクラムマスター、QA、テストエンジニア、マネージャなど、アジャイル開発や品質に関わるさまざまな役割の方々です。仮説検証を重視した研究を行うため、現場をお持ちの方を大いに歓迎しますが、これからアジャイル開発に取り組もうとしている方や、現場は持っていないものの強い関心をお持ちの方の参加も歓迎いたします。

主査 三菱電機株式会社 永田 敦